

「シドニー大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学法学部2年 中西 佑

①学習成果

今回の派遣を通して、大きく考え方が変わったものがいくつかある。その中でも特に私にとって大きい印象のあった二つを述べたいと思う。

まずひとつめが、長期留学に対するモチベーションである。1回生時は漠然と、私費で語学学校に留学するのみでもよいかと考えており、それが2回生になり、派遣留学をして海外の大学で、語学のみならず専門分野を学びたいというのぞみに変わったものの、夜ごと寝られなくなるような強い動機はえられないままだった。しかし今回、世界でも有数のシドニー大学において学べたことは、たった2週間の短い滞在であったにも拘わらず、その動機を与えてくれた。まずキャンパスの大きさと建物の荘厳さが日本の大学とけた違いなのである。在籍している留学生の数もはるかに多く、多様な観点からの意見をえられることも魅力である。教授の部屋のドアは時々開け放たれていて、そういう時は生徒の誰もが自由に入り意見を教授と交わすことができる。一番大きい図書館は9階まであり、自習するに十分なスペースがある。プログラムの一環で法学部の授業に参加したが、その講義では途中で休憩がとられ、学生たちはその時間、教室の前に列をなして質問していた。学生の講義に対する熱意がそもそも違うことも特筆すべきだが、さらに言えばこのシステムならば疑問を積み残したまま講義を最後まできく必要がない。日本法とは異なる英米法の概念がきけたことも興味深かった。このように、なにが京都大学を含む日本の大学にないのか、逆に言えば、留学すれば今までえられなかったものをどうえられるのか、といった明確なビジョンがみえたことで、漠然と「海外の大学を見てみたいな」という気持ちが、上記のようなものがえられる「海外の大学でどうしても学びたい」という痛切な思いとなった。これはとても大きな収穫であった。

二つ目がグローバル化に対する考え方の変化である。私はこれまでグローバル化によって、言語における英語の支配がみられるように、その他の文化においても優勢な文化の支配がすみ文化のモノクロ化がどんどん進んでいってしまうのではないかと、その一環として日本も支配的な他国の文化の波に飲み込まれてしまうのではないかと、という危機感を抱いていた。しかしながら、多文化共生をうたっているオーストラリアに行ってみれば話は全く違っていた。多様なバックグラウンドをもつ民族が、互いの文化を尊重しつつ自身の文化も保っていた。たとえば言語の面で言うと、英語という共通語はしゃべりつつも、自身のバックグラウンドとなる国の言語も加えて話すことができる、という人がほとんどであった。グローバル化イコール単一化、という図式のみではなく、世の中はつながりながらも、逆に言えばつながるからこそ、自身に特有の文化は際立って、人はそれを大切にできるようになる、という図式もありえると思うようになった。これも大きな考え方の変化であった。

②海外での経験

海外の大学での経験はすでに上に述べた。その他の生活習慣に関しては、様々な違いを感じたが、一番注意しないといけないと感じたのは、日本では丁寧ではあるが、他の文化においては失礼にあたる行為である。日本では鼻を勢いよくかむことよりもまだ鼻をすすめる方が失礼ではないが、オーストラリアにおいては人前で鼻をすするのはおならをするのと同程度に失礼と現地の学生からきいた。文化の違い、として簡単には受け入れられないような失礼な行為は、やはりしっかりと知っておくことが大事だと感じた。

③プログラム内容

内容は、大きく三つ「英語の講義、多文化にまたがる行為の講義、現地の文化体験」からなっていた。どれも満足のいくものであった上に、どの講義においても先生方はとても親身になって教授にあたってくれており、講義での質問に加えて、なかば関係のないような質問・課題も見てくださったことは、とても印象に残っている。また上に述べたように、派遣先であるシドニー大学の本物の講義に参加する機会がえられたことは、ほんとうに良い機会であった。

④進路への影響について

国家公務員に、特に外交官になりたい、という以前からあった希望がより強くなった。日本というバックグラウンドを背負ったうえで、他国の文化の素晴らしいところ（たとえばオーストラリアであれば多文化主義）を吸収し、それを日本にも還元できる、そういう進路をとりたいという思いを後押ししてくれたプログラムであった。